

簿記コース

はやわかり簿記の基本原則

簿記の考え方と取引の仕訳



はじめに

さあ簿記の学習をはじめましょう。

簿記というと難しそうなイメージがありますが、決してそうではありません。また、数字の羅列、面倒な計算、わけのわからない用語といった無味乾燥なものでもありません。

確かに、入口は難しそうな印象を与えますが、簿記は世界共通の普遍の技術です。技術であるからには、そこには原理・原則があり、それさえわかれば一瞬にして世界が大きく広がっていきます。簿記はまことに明快な論理の世界です。簿記という華麗な体系を身につければ、世界中のどこの会社でも通じる共通語を手に入れることができるのです。

簿記の技術の中で、とりわけ重要なのが「仕訳」です。簿記は仕訳が勝負です。この単元では仕訳とは何か、その基本のところからていねいに学習していきます。仕訳くらいはすぐにできるようになることをねらいとしています。本書の学習によって、まず仕訳のルールを確実に身につけてください。簿記の第一の関門はこれで突破できます。



目次

I. これならわかる複式簿記の考え方 5

1. カネやモノが動けば取引が発生 6
 2. 小遣帳を二面からとらえる 8
 3. 取引の因果関係をつかむ 10
 4. これから学ぼうとする簿記の概要 12
- 日商簿記検定試験 3 級の出題範囲 14

II. 簿記の仕事の流れをつかもう 15

1. 簿記とは何か 16
 2. 資産・負債・純資産と貸借対照表 18
 3. 収益・費用と損益計算書 20
 4. 貸借対照表と損益計算書の関係 22
- 練習問題 26

III. 仕訳のしくみとルールを理解しよう 27

1. 簿記の全体の手順を理解する 28
 2. 取引の 8 要素とその組み合わせ 30
 3. 仕訳のコツはキャッチボールで 34
 4. 勘定口座にどう転記するか 37
 5. 帳簿の種類と記入の仕方 40
 6. 期中の手続きから決算手続きへ 43
- 練習問題 44

IV. 取引をどう仕訳するか(1) 45

1. 現金・預金取引とその処理 46
 - (1) 簿記上の現金の範囲 (2) 現金過不足の処理
 - (3) 当座預金と当座借越 (4) 小口現金の処理
 2. 商品売買取引とその処理 53
 - (1) 「分記法」による処理の方法 (2) 「三分割法」による処理の方法
 - (3) 付随費用と返品・値引きの処理 (4) 商品売買取引を記録する
 - (5) 商品の有高と払出単価の算定
 - (6) 在庫管理に役立つ商品有高帳
 3. 掛け取引とその処理 63
 - (1) 売掛金と買掛金の仕訳と記帳
 - (2) 売掛金・買掛金を管理するための帳簿
 - (3) 売掛金を回収できなかったときの処理
 4. 手形取引とその処理 68
 - (1) 代金の決済手段としての手形 (2) 受取手形と支払手形
 - (3) 手形の裏書譲渡と割引
 - (4) 手形を管理する受取手形記入帳、支払手形記入帳
- 練習問題 75

I

これならわかる 複式簿記の考え方

簿記は数字の羅列と専門用語が次々に出てきて、わけがわからないもの — という印象を持つ人が少なくありません。何やら面倒くさそうな名前の勘定科目も簿記を近づきにくいものになっているかもしれません。しかし、簿記を知らなくても、みんな簿記の恩恵は受けているのです。暮らしの中で家計の計算をしない人はいないでしょう。会社や商店で商売をはじめとする経済活動を行えば必ず会計処理が必要になります。どんな場面においても必要になる会計処理の技術が簿記です。この章では、複式簿記の考え方を日常の生活の中での素朴な例をもとに学習することにしましょう。

かりかた 借方 (左側)	かしかた 貸方 (右側)
---------------------------	---------------------------

左側が借方，右側が貸方。まずこれをしっかり覚えることから簿記ははじまります。

(1) 商売の形態はさまざまでも活動目的は同じ

商売

世の中には実に多くの会社や商店が存在し、さまざまな**商売**をしています。例えば、モノをつくり、その製品を販売する製造業があれば、モノを仕入れて、その商品を販売する百貨店、スーパー、商店があります。モノをつくる会社と消費者にモノを売る会社の間立に立って、その仲立ちをする商社や卸商のような商売もあります。さらには、モノを売らずにモノを貸す商売もあれば、モノを運んだり、情報を伝えたりするようなサービスを売る商売もあります。

このように、商売そのものは、まことに多様な形態をとっていますが、そこで行われている経済活動をみると、すべての商売に共通することがあります。つまり、一定の資金を元手に仕事をし、その元手以上のおカネを得るということです。商売とは、この元手となる資本をそれ以上にいかに大きくしていくか、という活動にほかなりません。

(2) 取引の持つ二面性に簿記の本質が

仕入れ

販売

交換

取引

商売のごく一般的な形態を考えると、資本をもとに商品を**仕入れ**、その商品を仕入れ値以上の値段で顧客に**販売**し、その代金を受け取ることが成り立っていることがわかります。仕入れでは、仕入れ先から商品というモノを買い、その代金（カネ）を支払います。また、販売では商品というモノを顧客に引き渡し、その代金（カネ）を受け取ります。いずれの場合も、モノとカネが**交換**されていることに変わりはありません。このように、モノやカネが動くことを**取引**といい、商売はこの取引を継続して行っていくことといえます。

いま述べたのは、商品売買とよばれる最も基本的な取引の形態です。しかし、会社や商店の取引はこれだけではありません。右上図に示すようなさまざまな取引が行われていることに気づきます。